

ソーシャル・イノベーションとしての都市緑地のコモنز化 ——シモキタ園藝部を事例として

Social Innovation for Commoning Urban Green Spaces

——A case study on Shimokita Gardening Club

キーワード：『ソーシャル・イノベーション』『コモنز化』『都市緑地』

【要旨】

近年、市民自らが都市緑地を共有資源（コモنز）として管理し、様々な社会課題の解決に活用する社会活動が国内外で注目を浴びている。そうした活動の中でもシモキタ園藝部の活動は、ソーシャル・イノベーションとしての性格を持つ点に特徴がある。具体的には、様々な革新的なアイディアによって、①人と自然との関わりを作り出し、「都市の生態系」を循環させることで緑地の価値を再構築している点②市場的領域と非市場的領域を組み合わせた新たな経済の仕組みを創出し、緑地管理の仕組みを作り上げている点で、社会的成果を生み出している。本稿はシモキタ園藝部の存立過程から、シモキタ園藝部の理念・活動・組織にどのような革新性があるのか、また、そうした革新性はいかなるアクター（組織、モノ、自然）との連関から創出されたのかを分析する。都市緑地のコモنز化は新しい形のコミュニティや街への愛着を生み出す可能性を内包することが明らかとなる。

三浦 倫平

MIURA, Rinpei

（横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院 准教授）

1. はじめに



写真1 シモキタのはら広場

下北沢駅の南西口からわずか数分歩くと現われる緑地空間を初めて目にした人は驚くだろう(写真1)。下北沢という街は「若者の街」「サブカルの街」「演劇の街」「古着の街」といった表象が時代ごとに更新、累積されることで、国内外から多くの人が訪れてきた盛り場であるが、そうした街の喧騒とは一線を画するような緑溢れる自然が駅の近くに広がっているのだ。

また、この緑地が一般的な公園とは雰囲気が大きく異なるのも特徴的である。様々な種の草木がそれぞれのスピードで成長しており、高さも大きさもバラバラな緑地——しかし、それは放置された空間ということでは決してなく、細やかな手入れがされている。

周りを観察してみると、「イラガ発生中:刺されるととても痛い毛虫です」と注意が書かれた紙が木に付けられていたり、茅で作られた茅の輪が入り口付近に設置されているなど、緑を大切にしている人達の様々な気遣いや遊び心がこの空間には詰まっている。

「シモキタのはら広場(以下、のはら広場と略す)」と呼ばれるこの空間を管理するのはシモキタ園藝部という市民活動団体である¹⁾。2020年に下北線路街園藝部として発足した後、2021年に一般社団法人シモキタ園藝部となり、「まちの緑を、自分たちの手で」をコンセプトに、「のはら広場」だけでなく、小田急線が地下化した後の線路跡地(東北沢駅―世田谷代田駅間の約1.7km)に生まれた「下北線路街」の植栽管理を行っている(図1)²⁾。

2024年11月の時点で、緑を愛する住民や市民達250名近くが、園藝部のメンバーとして登録しており、種を撒き、手入れをしながら緑を育て、育った植物たちの恵みを活かし、雑草などを土に還し、堆肥化した土を再び緑の成長に活かす、といった形で自然の循環に向けて日々活動している。また、メンバーの創意工夫によって、自然に関する知識を学ぶ企画や、自然の恵みを活かした商品開発、自然をうまく循環させるための方法など、自然との様々な関わり方が生み出されている。2023年には「第43回緑の都市賞」で「内閣総理大臣賞」を受賞し、また2024年には「日本造園学会賞」を受賞し、近年は各種メディアで注目を浴びるなど、新たな下北沢の「顔」としても認知されつつある。

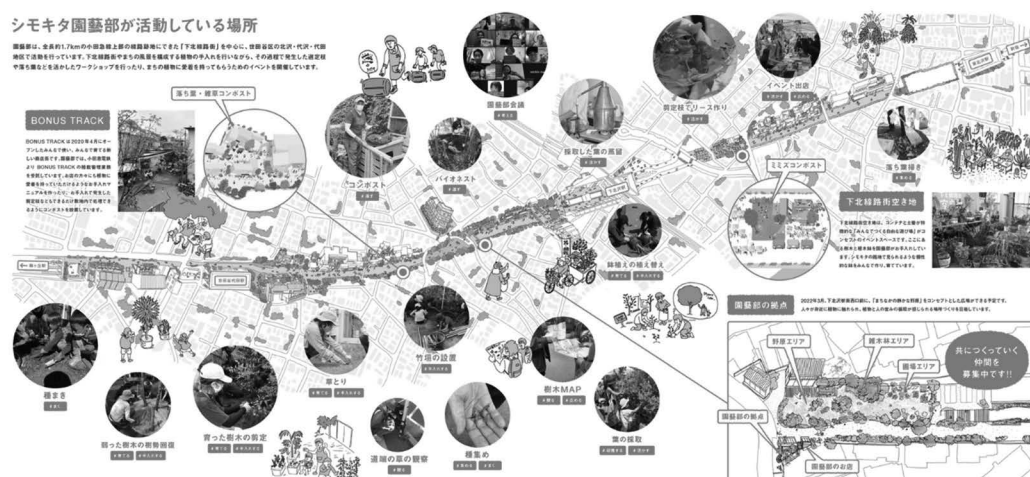


図1 シモキタ園藝部のフライヤー

近年、市民自らが自分達の手で、都市の緑地空間をコモンズとして管理、共有することで、様々な社会課題の解決に活用する社会活動が国内外で注目を浴びているが(新保 2022;近藤・Tokyo Urban Farming 2023)、そうした活動の中でも、シモキタ園藝部の活動はソーシャル・イノベーションとしての性格を持つ点に特徴がある。ソーシャル・イノベーションとは、「社会的課題の解決に取り組むビジネスを通して、新しい社会的価値を創出し、経済的・社会的成果をもたらす革新」(谷本・大室・大平・土肥・古村 2013:8)を意味する³⁾。シモキタ園藝

部は、緑地空間を「コモンズ化」させる新たな経済を作り出すことで⁴、自然と人の繋がりを回復し、生態系を循環させるという社会的成果をもたらしており、まさにソーシャル・イノベーションの先駆的な事例として位置づけられる。

そこで、本稿は、都市部における緑地空間のコモンズ化の可能性を検討するために、先駆的事例であるシモキタ園藝部において、いかなる過程を経て、どのようなイノベーションが創出されてきたのかについて明らかにする。その際、イノベーションを「社会的課題を認知し、その課題の解決に向けて、新しいアイディア・商品・仕組み等の創出、導入、修正、普及を行うこと」といった社会運動の過程として捉える (Hughes et 2018)。すなわち、革新的なアイディアは、それまでの運動の過程があって生み出されたものであるため、それだけを切り取って分析するのではなく、全体の流れを見ていく必要がある。

そうすることで、特定のアクターにイノベーションの要因を還元せずに、様々なアクター間の関係性のもとでイノベーションが動的に生み出されていく様相を明らかにすることが可能になる。すなわち、イノベーションが有する社会性、政治性を可視化することができる。

また、これまでの議論が、社会的企業家や多様なステイクホルダーなど、人間というアクターにイノベーションの創出の要因を還元してきたが (谷本・大室・大平・土肥・古村 2013)、イノベーションの対象が自然である本稿においては、自然やモノもアクターとして捉え、イノベーションの背景にあるネットワークの重要な構成要素として分析することを試みる (伊藤 2024)。

本稿の構成としては、2 節、3 節でシモキタ園藝部が現在に至るまでの経緯を明らかにする。焦点としては、2 節では、いかなる社会的課題が認知され、どのようなアクターが関連してきたのか、3 節では、いかなる革新的なアイディア、理念、活動が生み出されてきたのかといった点となる。4 節では、具体的に特定の活動 (コンポスト) に焦点を当て、いかなる過程でイノベーションが生起するのか、よりミクロな視点から分析を試みる。そして最後に 5 節で結論を示す。

2. 社会的課題の認知——協働による「緑」のコモンズ化

2.1 都市社会運動の継承——コモンズとしての「緑」と対話の実現に向けて

シモキタ園藝部は、下北沢地域における社会運動の問題意識や成果の蓄積の上に成り立っている。

下北沢地域では、2000 年代初頭から、小田急線の連続立体交差事業に伴い新たに整備されることが計画された補助 54 号線、区画街路 10 号線 (駅前広場)、更には、高層の建築を可能にする地区計画に対して、反対運動が起こっていた (三浦 2016)。そして、連続立体交差事業が進んでいくなかで、鉄道が地下化した後の線路跡地を積極的に公共の利用に供すべきであるという主張も反対運動側からなされるようになった⁵。その際、キーワードとなっていた

のが「緑」であった。

幾つかの運動団体が主張を展開していた中で、NPO 法人「グリーンライン下北沢」は線路跡地の在り方をめぐって市民から意見を募集し、専門家の協力のもと具体的な案を作成し、2012年2月には世田谷区に提案するなどの活動を行っており、当初から「緑」への意識を強く持っていた団体であった。グリーンライン下北沢にとって、「緑」は「人と自然がつながり、人と人がつながるコミュニティを育む場」を意味しており（高橋・小林 2015:204）、単なる鑑賞の対象ではなく、人や地域をつなぐコモンズとして位置づけられていた。こうした理念はシモキタ園藝部の理念にも継承されている（後述）。この点について、当時グリーンライン下北沢のメンバーであり、現在のシモキタ園藝部の共同代表理事の一人である関橋氏は以下のように語っている。

グリーンラインの段階で、ただ緑を増やすんじゃなくて、コミュニティにとっての公共の場とすることで、この線路跡地が生かされる、という事をずっと訴えていたと思うので、それが実現したということはすごく意義があると思います⁶

コモンズの重要性に加えて、それを実現するための対話の場もグリーンライン下北沢は重視していた⁷。2016年10月に世田谷区によって、線路跡地の上部利用に関して誰でも自由に参加して話し合い活動ができる場として「北沢PR戦略会議（現シモキタリングまちづくり会議）」が設けられ（三浦・武岡編 2020）、その中で「緑あふれるまちづくり」を目的とする「緑部会」が作られると、グリーンライン下北沢のメンバーも多く参加し、新たに参加してきた主体と共に、緑をコモンズとして活用するまちづくりのための交流、議論、活動がなされていった。

2.2 立体緑地計画に対する反対——区・緑部会・立体緑地の連関

緑部会、そして現在のシモキタ園藝部にとっても、重要な転機となったのは、世田谷区が計画していた下北沢駅南西口立体緑地の設置に対する緑部会の反対であった。ニューヨークのハイラインをモデルとした高架状の立体緑地が、実際に設計を進めていく段階で、当初のイメージ図よりも大きなものとなり、結果として緑地・小広場の面積が当初予定よりも半分近くになってしまうことが分かり（図 2）、また、立体緑地に隣接する住宅への影響も懸念されることから、緑部会は 2018 年 3 月に開催された世田谷区の計画内容等報告会で代替案を提案している。

世田谷区の計画

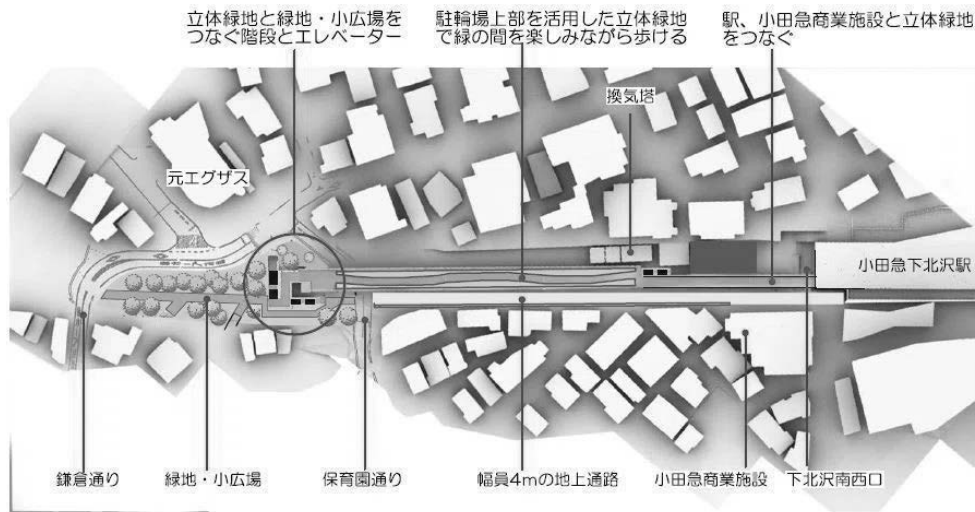


図2 立体緑地の計画図

それに対し、世田谷区の複数の課(街づくり課、工事第一課、公園緑地課)が集まり、緑部会と対話を重ね、技術的にクリアしなければならない点などの情報を緑部会と共有していた。

当時の話し合いにも参加していた北沢総合支所街づくり課の担当職員北島氏によれば、そうした対応は「レアケース」ではあったが、当時のまちづくり課の小柴課長が「地域の思いがこれだけあるから、みんなで考えたい」という意向を持っていたことから、そうした場が実現している⁸。

その後、2018年7月に緑部会は、緑地の長さをおよそ半分にする代案を提案すると共に、代案についての住民アンケートを行い、結果についても区に提出している。そして世田谷区もその思いを受け入れ、立体緑地を当初の予定よりおよそ半分の長さにして設置することを決定する。立体緑地を媒介にして緑部会と世田谷区の結びつきが強まった契機であったと言えるだろう。こうして、立体緑地が短くなったことで、新たに生まれたエリアを活用して生まれたのが、今の「のはら広場」である。

2.3 いかなる広場空間を作り、管理するか——「作る庭」「支援型開発」理念との関連

のはら広場は図3にもあるように、世田谷区が立体緑地を整備する予定であったエリアと小田急電鉄が管理するエリアが一体となっている。世田谷区が「身近な広場条例」に基づき管理するエリアが小田急電鉄に委託され、小田急電鉄がエリアを一体として管理する仕組みが作り上げられた⁹。

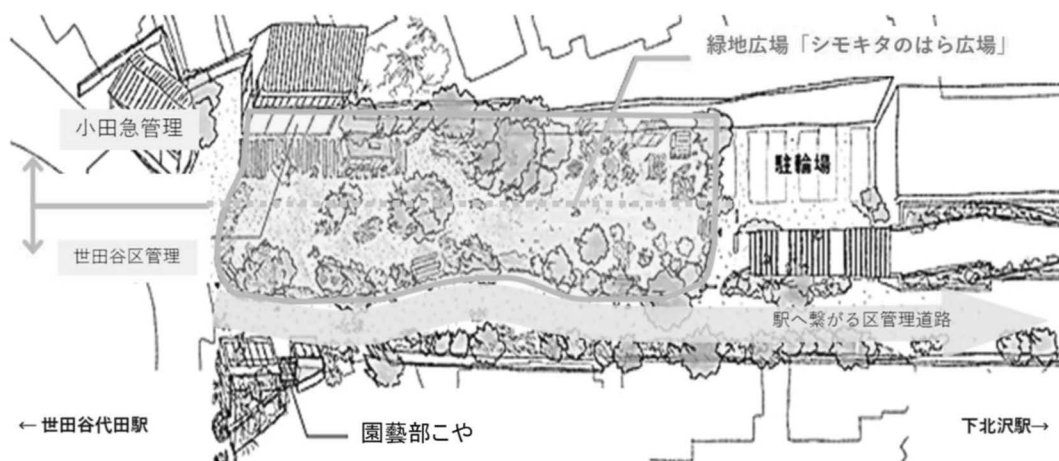


図3 シモキタのはら広場の管理区分¹⁰

世田谷区と小田急電鉄の連携で生み出された広場を誰が管理するのか。ここで重要な役割を担ったのは、ランドスケープデザイン事務所のfolkだった。

2018年頃から「下北線路街」のランドスケープの全体構想づくりに関与していたfolkは、代表の三島氏が単に「見る庭」ではなく、「使う庭」を作ることが重要だという理念を持っていた¹¹。そこで、管理業者による植栽管理ではなく、地域内外の人々が植物と関わり、植物を活用し、日々の暮らしを成り立たせていく「現代のまちの雑木林」というコンセプトをfolkは小田急電鉄に提案している(三島 2022)。小田急電鉄の側も「主役は地域のプレーヤーであり、デベロッパーはサポート役になる」ことを意味する「支援型開発」をコンセプトにエリアの開発を考えていたこともあり、この提案を受け入れている(橋本・向井 2022)。

そこで、folkは地域内外から線路跡地に「使う庭」を生み出し、日常的に維持管理し、活用する主体を集めるために「下北線路街園藝部」という団体の立ち上げを企画し、その準備に向けて2019年10月から2020年3月にかけて公開ワークショップを3回開催する。このワークショップに、緑部会のメンバーも参画し、また新たに地域内外の主体が参加することとなる。その参加者の多くが、後のシモキタ園藝部の活動を担う主要なメンバーとなり、次節で見えていくように、様々な革新的なアイディア、理念、活動、仕組みを作っていく。

3. 革新的なアイディア・活動・仕組みの創出——シモキタ園藝部の誕生

3.1 様々なアイディアを触発する議論の場

folkが開催した第1回目のワークショップである「下北園藝探検隊」(2019/10/26開催)は、「個性的な鉢植えや家庭菜園、巨木など、シモキタの人たちが育ててきた、愛と面白さに溢れた『みどり』を発見」することを目的としたものであった¹²。これは、下北沢の街に存在しているローカルな園芸文化を再発見し、参加者間の交流や「緑」を活用するアイディアを喚起させるイベントであったと位置付けることが出来るだろう。

また「下北のまちと園芸のはなし」(2019/11/17 開催)では、古道具をマープリングによって植木鉢にするワークショップを行い、「下北園藝企画談義」(2020/1/15 開催)では参加者が今後取り組みたい企画や、運営の在り方について話し合いが行われている。

2020年4月にはコロナウィルス感染症の流行を受け、緊急事態宣言が出された為に対面での活動は制限されることもあったが、オンライン(zoom)なども併用しながら「下北線路街園藝部会議」が毎月開催され、組織の在り方や活動内容などについて、議論が継続して行われていた。

この時期の話し合いは、その後のシモキタ園藝部の活動にとって大きな意味を持っていたと言える。なぜならば、これらの話し合いの中で、線路跡地に生まれる自然をいかにして維持・管理・活用し、日々の生活を豊かにするか、という具体的な活動のアイディアの数々が生まれていったからである。後述する「古樹屋」「ちゃや」「園藝学校」「コンポスト(堆肥)事業」といった現在のシモキタ園藝部の主要な事業の基になるようなアイディアや、毎月開催される「園藝部 DAY」(自然の恵みを様々な企画で体験できるイベント)の企画につながるアイディアが議論のなかで提示されていた¹³。

例えば、後述するコンポスト事業のリーダー的存在である斉藤氏は、この時期の話し合いの中で、堆肥化のアイディアを提案している。斉藤氏は2015年頃から既に自宅でコンポストの容器を設置して堆肥を作っていたが、必ずしも堆肥に精通していたわけではなく、話し合いの中で、その興味関心が認められたことで、その後、コンポスト事業を成立させていく為に勉強や情報収集など活動に積極的に関わっていくようになる¹⁴。

「アイディアは誰でも言えて、そのアイディアに関われる人がそれに関わっていった」と斉藤氏が語るような議論の場の雰囲気は、現在まで維持されている(後述)¹⁵。

さらに、活動初期の議論において、提案されるアイディアがイラストにされていったことも、革新的なアイディアを生み出すことにつながっていったようである¹⁶。

会議で出たアイディアを、その場で絵にしたりして、色々なイラストが残されていた。…イラストによって具体的なイメージが浮かんで、触発されて、そこからまた色々なアイディアが出てきた。…自分がコンポストの中でも、クルクル回転するコンポストをやってるよ、って言ったら、それも絵に書いてもらって(斉藤氏)。

提案されたアイディアをイラストにすることで、具体的なイメージが喚起され、そこから更に新たなアイディアが生まれ、実現可能性が高まったり、より社会的意義のある活動につながることもあるだろう。また、イラストというモノにすることで、アイディアは団体に残り続け、新たなメンバーが関わる可能性も残る¹⁷。

以上のような形で、下北線路街園藝部会議において、今後の活動の内容、理念、組織の在り方などが活発に議論されていった中で、小田急電鉄から「下北線路街」の植栽管理の業務委

託を打診されたことを契機に、2021年8月に一般社団法人シモキタ園藝部として法人化する¹⁸。そして2022年3月には現在の拠点である「こや」が完成し、本格的な活動が始まることとなる。

3.2 シモキタ園藝部の理念・活動——「生態系」を活かす文化に向けて

「まちのみどりを、自分たちの手で」——シモキタ園藝部の理念はこの一文に端的に示されている。すなわち、フォルクの「現代のまちの雑木林」という構想を引き継ぎ、管理業者に植栽管理を委ねるのではなく、人々が緑に触れ、人と緑、人と人とが関わり合う文化を作っていくことを目指している。

さらに、シモキタ園藝部が発足し、より強調されるようになった理念として「循環」がある。シモキタ園藝部が発行するリーフレットには以下のような文章が記載されている。

園藝部では、まちの植物を地域の共有資源（コモンズ）とみなし、丁寧に手を入れ育てながら、植物から得られる恵みを生かした活動を行っています。私たち人間よりも長く生きる植物のサイクルに寄り添いながら、園藝部の活動が生まれ、循環していくことで、世代を超えてまちと自然を大切にする心を育んでいきます

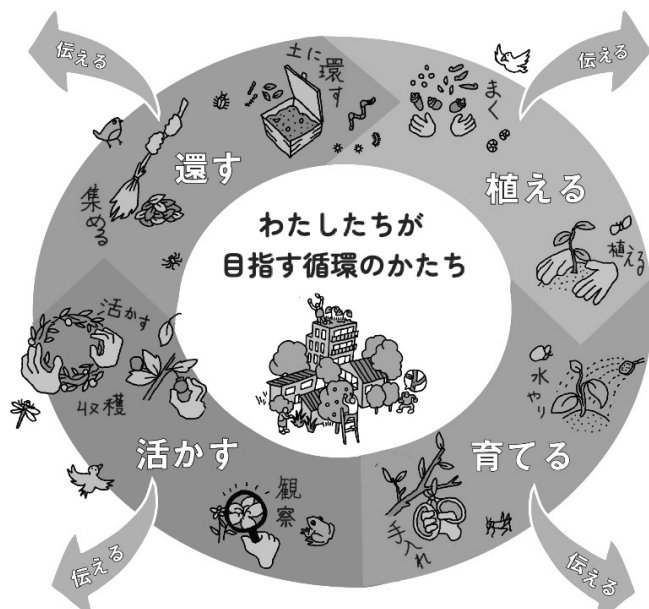


図4にあるように、植物の循環過程に寄り添い、自然を自分たちの手で育て、自然がもたらす恵みを活かし、全てを土に還し、再び循環させる活動を展開している。また、植物の循環にとどまらず、植物と共生する微生物、虫、動物など、生態系の循環も視野に入っている。

まず、①「植える」という過程は、緑部会・世田谷区・小田急電鉄の連携で生み出された「のはら広場」（設計施工監理はフォルクが担当）において中心的に行われている。2022年3月に世田谷

図4 シモキタ園藝部の「循環」のコンセプト¹⁹

区主催で「種まきワークショップ」が開催され、町内会や園藝部のメンバーが種を撒くことから始まり、その後、子供たちに自由に歩いてもらうことで広場の中の道が作られている。

雑草と一般的に呼ばれるものから、園芸種、在来種、外来種といった様々な種類の草木が植えられている。のはら広場は下北沢駅南西口から近隣の商業施設(BONUS TRACK)の間に位置し、誰でも自由に入れるため、日常的に自然に触れる機会を提供している。

また、周辺の住宅が育てきれなくなった植物を引き取り、仕立て、新たな持ち主へ繋いでいく「古樹屋」という活動も行われている²⁰。シモキタ園藝部を介して、街全体に緑の循環を生み出していく活動でもあるだろう。

次に②「育てる」という過程については、シモキタ園藝部のはら広場と、東北沢駅から世田谷代田駅間の下北線路街の植栽管理を小田急電鉄から委託されている。園藝部のメンバーが水やり、草刈り、樹々や地被植物の手入れ、樹勢回復、落ち葉掃き、カントリーヘッジの造作など、日常的に手入れを行っている。こうした管理は、植物の状況を見て、適宜草刈りや剪定などの管理を行うという「順応型管理」の方針で行われている。その為、あらかじめ、作業項目と数量を確定し、特定の日程で一律に作業を行う「確定型管理」と呼ばれるような、一般的な公園の植栽管理方式とは管理方式が異なっている。

「市民が触れてはいけない緑ではなくて、関われる緑があることによって、心が豊かになり、緑と人が関わり合って、豊かなコミュニティになり、緑も豊かになっていくことを目指している」と関橋氏が述べるように、順応型管理は園藝部の循環を支える重要な活動となっている。

この活動は誰でも参加可能となっているが、中心的な担い手を継続的に生み出す仕組みとして、基本的な植栽管理技術や、人々が自然に親しみ豊かな暮らしを育むための知識を学ぶ場(「シモキタ園藝学校」)を開校している。園藝学校による「エコガーデナー」公開講座の受講者、修了者が植栽管理の中心的な担い手として活動しており、日常的に行われる順応型管理が参加者の学びや楽しみにもなっている²¹。

次に③「活かす」という過程は、自然の恵みを様々な形で活用する過程であり、園藝部のメンバーによって様々なイベント企画が実施されてきた。四季の変化に応じた個性的な企画が月に2~3回実施されてきている。

例えば 2024 年の秋から冬にかけては、「循環ツリーと竹ランタン作り」(2024/12/21 開催)「落ち葉拾いリレー」(2024/12/4、7 開催)、「～いきものたちの冬の棲家をつくろう～インセクトホテル建設」(2024/11/30 開催)「のはらスケッチクラブ落ち葉の色を描く」(2024/11/28 開催)「ハーブ摘みの会」(2024/11/23 開催)といった企画が実施されてきた。こうした企画には園藝部のメンバーだけでなく、周辺地域に住む親子連れも多く参加しており、園芸文化を地域に伝える重要な場となっている。

また、のはら広場(小田急電鉄管理エリア)でとれる野花を使ったワイルドティー、切花、リースなど、四季の植物の成長に応じた商品が開発され、ちゃやで販売されている。さらにちゃやでは、近隣の建物の屋上でミツバチを飼育し、作り出した天然非加熱の蜂蜜「シモキタハニー」も販売している。ミツバチは、蜜を集める過程で花粉を媒介するため、のはら広

場だけでなく、周辺の街の緑化も推進されるという効果も生まれている。

最後に④「還す」という過程は、コンポスト事業が該当する。コンポスト事業は、①②③の過程で生まれる雑草・刈り草や、周辺の店舗から生まれるコーヒー粕、フルーツパルプ、そば殻などのゴミを微生物の力を利用して発酵・分解させ堆肥を作る事業である（その具体的な様子は4節で詳述する）。堆肥は樹勢回復や古樹屋の活動に使われたり、販売されている²²。また、事業とは別に、堆肥を利用して、新たに野菜も栽培し、循環を実現している²³。

以上のように、線路街跡地のエリアを中心とした植物、小動物、虫、微生物、土などの生態系の恵みを維持し、共有の資源として日常生活の中に取り入れていくための様々な試みがなされている。そして「循環」を重要な理念とすることで、雑草、刈り草などをゴミとして処分するのではなく、「宝物」として表現し（後述）、堆肥に利用していくなど、生態系との共生が図られている。さらには街で排出されるゴミも生態系の力を活用して循環の過程に入れ込んでいく。まさに「都市の生態系」（三島 2022）としての可能性を示す事例として位置づけることができるだろう。

そして重要なことは、これらの活動を事業として成立させている点にある。そこで次にシモキタ園藝部の組織のあり方について見ていこう。組織のあり方にもシモキタ園藝部の革新性を見出すことが出来る。

3.3 シモキタ園藝部の組織のあり方——ワーカーズ・コープをモデルとして

シモキタ園藝部は、ワーカーズコープ（労働者協同組合）の考え方を参考に、組織づくりを行ってきている。ワーカーズコープとは、「働く人や市民が協同で出資し合い、一人一票の平等な決定権を持ち、意見反映を通して事業計画や労働条件づくりなど経営に参加し、生活と地域に応える仕事を協同でおこす協働労働の協同組合」（市民セクター政策機構 2021:111）である。すなわち、出資、経営、活動のすべてを構成員が担う点に特徴がある。

具体的には、法人化した際に一定額以上の出資をした人が理事（14 名）、一定額以下の出資者が社員（10 名）となり、共に組織の運営の中心を担い、実際に活動も行っている。また、会費を納入すれば誰でも部員になることが可能で、1 年以上の活動と他薦で社員、理事になることも可能になっている²⁴。

「少数の意思ではなく、より多くの部員が自分自身の意思を持って成り立つ組織を作る為、ワーカーズコープの考え方を参照した」と関橋氏は述べており、「フラットでオープンな組織」「誰もが自分事として関われる組織」が目指されている。

そして、こうした組織のあり方が、様々なアイディアの創出の重要な背景となっている。それが象徴的に現れているのが、企画案の承認のプロセスである。関橋氏によれば、企画案がある人は Slack か、誰でも参加可能な「のはら会議」で提案し審議されるというプロセスになっており、企画に課題があったとしても「完全に認められない、ということはない」とのこ

とである。「こうしたらどうか」という肯定的な意見が出される為、提案したら実現する雰囲気があるそうで、下北線路街園藝部の頃の話し合いの場が現在でも展開し、一人のアイディアに複数のメンバーが連なり、アイディアの実現性が高い組織になっている。

組織の経営としては、収入は、小田急電鉄からの植栽管理の委託費が割合として一番大きく、それ以外には、各事業の収入、年会費、助成金などを組み合わせている²⁵。支出としては、拠点が小田急電鉄の土地にある為、小田急電鉄に賃料を支払っている。また人件費としては、活動を中心的に担うコアメンバーに時給 1200 円ほど払ったり、メンバーに専門的な仕事を依頼する場合は個別に報酬を支払っている²⁶。それ以外に関しては、活動 1 時間あたり 500 円相当のクーポン(ちゃや、シモキタ園藝部のワークショップ参加費等で利用することが可能)を渡している²⁷。200 名を超える部員に対し、全てを時給で払うにはコストがかかる為、このような工夫を行っている。

そして、この工夫は、園藝部の活動の対価が現金だけでないことで可能になっている。「お金が目的じゃないです。お金が目的だと園藝部は割に合わないです。楽しいからやっている」(関橋氏)という語りもあるように、出資・経営・活動をすべてメンバーが担う組織において、活動それ自体がコンサマトリーな価値を持っている。すなわち、「生態系」を活かす文化を創り出す事業に楽しさ、学び、生きがい等、様々な意味をメンバー各々が見出しているのだ。

以上、シモキタ園藝部の現在に至るまでの経緯と、その理念・活動内容・組織のあり方を明らかにしてきた。線路跡地の有効活用という課題に対して、オープンスペースを「緑」の空間に作り変え、人々と生態系の様々な関わり方を生み出すことで、生態系を循環させ、空間を人々にとって愛着のあるコモンズとして存立させていく運動の全体的な過程を示した。次に、具体的な活動に焦点を当て、参与観察のデータをもとに、いかに活動の中でイノベーションが起きているのかについて見ていくことにする²⁸。

4. イノベーションが生まれる過程——コンポストチームへの参与観察から

4.1 コンポストの活動の一日

コンポストチームの活動の一般的な一日を描写しよう。土曜日の午後、のはら広場にあるコンポスト小屋「なや」の前に、メンバーが集まってくる²⁹。「なや」とは、2022 年 5 月から 2024 年 12 月現在までメンバーが DIY で作ってきた木製の小屋であり、この小屋の中で植栽管理の過程で発生する刈り草や雑草を堆肥化させるのだ(写真 2)。



写真2「なや」（正面図、側面図）

メンバーが集まると、初めての参加者がいたので、簡単な自己紹介や雑談が行われる。数分後、リーダー的存在である齊藤氏がその日の作業内容を伝え、「さて、皆さん、問題です。堆肥にとっては何が一番大事でしょう?」とクイズを出す。それぞれ参加者が「水?」「温度?」といった回答をする中、「正解は、水、温度、そして空気です。だから切り返しが大事なんです」と、堆肥化に関する知識を再確認、共有する。

「切り返し」とは、刈り草・雑草・街のゴミといった有機物の堆積を熊手フォークやスコップによってかき混ぜる作業を意味する。そうすることで、好気性微生物による有機物の分解を促進させるのだ。切り返しの際には適宜、コーヒー粕などの街のゴミが追加される（写真3）。



写真3 切り返しの作業

切り返しの作業をしていると「発酵が進んでいる堆肥は外側に、発酵が進んでいない堆肥は中央に移動させる」という重要なアドバイスが適宜なされるが、基本的にはそれぞれ参加者の裁量に作業は任せられる。時折、子供が作業に参加することもあるが、作業を中断して土の中にいる幼虫や虫を観察しながら作業をしていることもある。切り返しが終わると、発酵を進めるために、水道にホースをつないで水を入れていく(20分間 200ℓほど)。

この一連の作業を2週間に1回のペースで合計6回行くと堆肥が完成するというスケジュールになっている。2022年7月から始めて、2024年12月までで8クール分の堆肥が完成している。

切り返し作業が終わると、メンバーそれぞれの得意分野や気になっていることの作業が進められていく。完成した堆肥を使って栽培している野菜の手入れをする人もいれば(写真4)、「なや」の補強や屋根の増築を行う人もいる(写真5)。「なや」の整理や清掃をする人もいれば、のほら広場を通りかかった人に「こんにちは」と声をかけたり、かけられたりして、コンポストの活動やシモキタ園藝部について説明する人もいる。



写真4 堆肥で栽培される野菜



写真5 なやの増築、補強

作業開始から1時間弱が経過し、それぞれの活動がひと段落着くと、団欒が再び始まる。堆肥化の状況や野菜の調子、特に鼠が野菜をかじってしまう問題などが語られたり、今後のスケジュールが共有される。また、この場でも色々なアイデアが出されていく——「育てた野菜で鍋パーティをしよう」「ウズラを育てよう」「ウズラの卵をコンポストの熱で温めよう」「切り返しが楽になるように、なやの下をすのこみたいにして、持ち上げれるようにしよう」——³⁰。

その後、日が暮れる頃になると、クーポンが配られ、「お疲れさまでした。また2週間後!」と斉藤氏が締めめの挨拶をして、各自が帰り支度を始めていく。

4.2 作業をめぐる創意工夫と試行錯誤

コンポストチームの一連の作業は、各メンバーが試行錯誤しながら、創意工夫を凝らしてきた。

まず、一連の堆肥化の進め方は、「バークレーメソッド」と呼ばれる短期間で土に還す方法を参考にしながら、自分たちなりの作業の仕方を作り上げてきた。当初、事前に想定していた雑草の量は1週間に1m³だったが、夏の植物の成長スピードは予想を大きく超え、1週間に4m³の雑草の量となったため、急遽、集草置を作り、収蔵できるようにしている³¹。その後は、切り返しが楽になるようにビニールパイプ3本に穴を開けて有機物の堆積の中に挿し込ん

だり、有機物の保湿の為に何が良いかを検討して、髪の毛でできたヘアーマットを有機物の堆積の上にかけたりもしている。

有機物の中に入れる街のゴミについても、当初は近隣の蕎麦屋からそば殻を貰っていたが、ネズミが多く来てしまったことから現在は貰うことをやめている。また、ビール粕についても匂いが出てしまうため、周辺住宅に影響が出る事を考慮して、これも現在は貰うことをやめている。貰うことをやめるゴミがある一方で、実験的に新たにゴミを貰うことも計画している。周辺の学生寮に住む学生から話があり、「野菜くず」を入れることを現在計画しており、「とりあえず入れてみる。それでどうなるか。匂いが出るとまずいけど、野菜くずだから匂いは出ないんじゃないかなと思う」(斉藤氏)という形で、日々、より良い堆肥化の作業に向けて実験的な取り組みを行っている。

そして、そうした実験的な取り組みがうまくいっているかどうかの判断基準として「有機物の温度」がある。コンポストチームは常に温度計で有機物の堆積の温度を測定しており、50度~60度ぐらいの温度になっていれば、「微生物が発酵している=作業がうまく進んでいる」ことの確認になるという形になっている。

ただ、ここで重要なのは、温度が作業の進み具合の絶対的な判断基準になっていない、という点である。「(温度が低くても)あまり気にしない」と斉藤氏が答えるのは、第一に、パークレーメソッドが「通気性の良いコンポスト容器を作っているのも、その場所に適した微生物が頑張っ、て、すぐに適正な温度に戻る」という見込みがあるからということと、第二に、「農業をやるわけじゃないから、そこまで厳密にはしていない」という方針があるからである。ここで急いで付け加えなければいけないのは、堆肥の質については近隣の造園からもお墨付きをもらっているということである。すなわち、厳密に分量を決めて定型化されたやり方で堆肥を作っていく農業のような堆肥化の方針ではなく、常に実験的に試行錯誤を積み重ねながら、より良い堆肥化を考えているのである。そうであるが故に、多少の温度の変化には動じないということなのだ。

4.3 自然・モノを介したイノベーションと繋がり

以上のような創意工夫はコンポストチームのメンバーの意図だけに還元されない。そのことを示すうえで重要になるのは、メンバーが度々口にする「宝物」というフレーズだ。

第一に、「宝物」という表現は、以下の語りに表れているように機能的価値という意味が内包される。

こういう葉っぱはゴミじゃない。宝物。それを捨てちゃダメでしょう。本当はそういうことをみんなが分かって、なるべく捨てないで、コンポストにして、利用してもらってという形で、循環が常識的になるといいなと思う。...自分にとっても宝物ですけど、やっぱり本来はみんなの宝物だと思います(斉藤氏)

第二に、「宝物」という言葉には、「関係的価値」(鬼頭 2024)という意味も内包される。「関係的価値」とは、機能的価値に還元されない人と自然の関係性の価値を意味するものである(Muraca 2011)。目の自然を「かけがえのないもの」として人が愛着を持って捉えるような関係性は、コンポストチームと堆肥との関係に見出すことができる。コンポストチームによる堆肥への手入れは定型化した作業ではなく、愛情を伴った「ケア」(西尾 2024)として位置づけることができる³²。

こうして、誰にとっても役に立つものであり、また愛着が付与/共有されたものでもある「宝物」の為に、創意工夫が促される。また、その結果は不確定なものである為、常にチェックがなされ、そして再び新たな創意工夫が促されていくのだ。

また、自然だけでなく「なや」というモノも創意工夫を促している。「なや」は近隣のカフェが移転した際の廃材を利用して作られており、2024年12月時点においても、遮熱シートをかけるために屋根部分(パーゴラ)を製作中である。斉藤氏は建築設計士として働いており、コンポストチームには他にも建築関係の仕事をしていたりDIYを趣味にする人がいるため、「なや」は共同作業によって製作されている。そして、「循環」の為に千葉や神奈川の竹林で不要となった竹を貰い受けて製作している為、それぞれ竹の形状、大きさ、長さがバラバラとなっており、設計図を書いて製作するという従来の手法を用いることができず、工夫が必要とされる。

(頂いてるものでしか作れないから)誤差何ミリ以内で両方平行に材料をつけてつくることができない。だから1回試しに作ってみて、どこが悪いって大体わかったから、あとは何かで工夫する。考えてもわかんないから、しばらくほっとくと、意外と何か浮かんだりしてできる

このように、それぞれの竹との「会話」を通して、創意工夫が促され、「なや」を作っている。そしてこうした作業を通して人やモノ、人同士の繋がりももたらされている。というのも、「なや」は通気性を良くするために、板を互い違いに組んで作られており、脆弱性を抱えているからだ。その為、「なや」自体もケアの対象となる。例えば、ある時、有機物の堆積を押さえている板が有機物の重さに耐えきれなくなり曲がってしまったため、メンバーが協力して修理をすることがあった。修理の過程で「(なやのために)何かできることはないか」という発言が見られたり、修理が終わった後に歓声が上がるなど、「なや」は道具以上の存在としてメンバーと結びつき、メンバー間の結びつきももたらしている³³。

同様に、堆肥で栽培された野菜を介して、人と自然、人と人の繋がりが生み出されている。野菜は販売するものではなく、堆肥の状況を判断するために栽培されているが、メンバーによって愛情をもって栽培されている。鼠が野菜をかじらないように、野菜が置いてあるテ

ブルの位置を変更したり、脇の生け垣を短くしたり、野菜に網をかけたり、様々なケアがなされていく。また、野菜が置かれているテーブルはのはら広場の通り道と接しているため、野菜の手入れ中にのほら広場を通り抜ける人々との会話が生まれている。人の目に触れやすい場所に、人の目を引きやすい野菜が存在することで、コンポスト事業・シモキタ園藝部と街を行き交う人々とのつながりも生まれているのだ。

5. 結論——緑地のコモنز化をめぐるイノベーションの背景と効果

新自由主義的な都市空間の再編に対抗するために、多くの都市社会運動は「緑あふれる自然」をオルタナティブな空間として構想してきた。しかし、緑地を国や自治体に要求する一方で、市民が緑地を消費（鑑賞）するだけでは、これまでの都市社会運動が理想としていた都市の自治には結びつかない。より豊かな都市生活を自らの手で実現させていくために、市民が都市部の緑地を共有資源（コモنز）として手入れし、日常的に関わり合うことで、「自然の恵み」を得られるようにする必要がある。シモキタ園藝部が誕生し、現在に至るまでの一連の過程は、そうした自治のための「アントレプレナーシップ」（斎藤 2023）を生み出すソーシャル・イノベーションであった³⁴。

その革新性は、理念・活動・組織といった次元で見出すことができる。すなわち、植物や様々な生き物を「生態系」として循環させるだけでなく、人間が作り出すゴミも循環の対象に含めることで、人間も含めた「都市の生態系」の循環も目指すという理念に革新性を見出すことができる。そして、その理念を実現するために、生態系と人々の日常生活との関わりを増やしていくための活動を様々な創意工夫によって実現してきた点にも革新性を見出すことができる。さらには、ワーカーズコープをモデルとした組織を作り、出資・経営・活動をすべてメンバーが担うことで、「フラットでオープンな組織」「誰もが自分事として関われる組織」が作り出されてきている点も重要だろう。そうすることで、自分たちの手で、愛着、生きがい、やりがいといった非市場的領域の交換関係を活用した経営を可能にしている。

こうした革新的なアイデアの創出や実現が可能になっているのは、第一に、小田急電鉄、世田谷区、シモキタ園藝部の間に連関が生み出されていったことが大きく影響している。第二に、様々なアイデアを触発する議論の場が作りだされ、一つのアイデアをめぐる複数のメンバーが連関する形で、アイデアの実現性が高められていたことも影響している。組織のあり方自体がそうした点を可能にしているだろう。

また、コンポストチームの活動からも描写したように、自然それ自体がイノベーションを促している。それは園藝部の他チームにも見出せるものであり、「自然を見て、ただ綺麗と思うのではなくて、この町の環境を支えてくれる存在として植物が健全でいられるように、そのお助けしたいという感覚でやりたい」（関橋氏）という語りもある。また、自然を介して、街を行き交う様々な人との対話や交流も生み出されている。

同様に、自然と人を媒介するモノ自体もイノベーションやつながりを生み出している。こ

れは「生態系」という概念を、「人間の活動やそれに使われる工作物・機器なども含めたもの」として再定義する必要性を示唆していると言えるだろう(及川 2023:96)。自然やモノに促される形で、人が創意工夫し、手入れをし、自然・モノと人の結びつきが生まれ、生態系が循環していく。

こうして、のはら広場という具体的な場所を介して、地縁によらない「一時的かつ周期的な凝集」(阪口 2022:20)という形の新しいコミュニティも生み出されてきている。また、そのコミュニティの愛着の対象は「生態系」から「街」へと拡張していく。「最初はそこまでシモキタに愛着はなかったですね。ただ今は住んでいる中目黒より愛着はあります」(斉藤氏)というように、緑地のコモنز化を通して街への愛着も生み出されている。

都市部における緑地のコモنز化は以上のような可能性を持つ運動であり、その存立過程をソーシャル・イノベーションという視点から分析することは今後の都市研究に有益な視座を提供するだろう。

¹「藝」の文字は象形文字で、元々は人が木を植える姿から作られた文字であることから、「誰もが緑に触れ、緑を育てる地域社会を目指す」という組織のコンセプトに合致するという点で、一般的に使われる「芸」の字ではなく、「藝」の字が採用されている。

² 連続立体交差事業によって小田急線が地下化した後の線路跡地の利用に関して、東京都、世田谷区、小田急電鉄が協議、調整を行い、2013年11月に決定された施設の配置エリアを公表している。「駅前広場」「通路」「緑地・小広場」「自転車等駐車場」といった公共利用に供されるエリア以外の住居、商業、業務系施設が配置されるエリアが後に「下北線路街」として称されることになる。下北線路街は2016年から順次施設が完成し、2022年5月に全面開業となった。シモキタ園藝部は小田急電鉄が権利を持つ下北線路街のエリアの植栽管理を小田急電鉄から委託されている。

³ ソーシャル・イノベーション研究の対象は、市場のメカニズムを通じた社会問題の解決を図る動きだけではないことに留意する必要がある。市場的領域と非市場的領域を組み合わせた新たな経済の仕組みの創出を通じて、社会問題の解決を図ろうとする動きを捉える研究も多い(Evers and Laville 2004=2007)。後述するように、シモキタ園藝部が作り出してきた経済は、愛着、生きがい、やりがいといった非市場的領域の交換関係も活用していることもあり、本稿もその系譜に連なっている。

⁴ 都市のコモンズは所与のものとして存在するのではなく、目的の共有、共有財の領有、維持、管理といった「コモنز化」(Harvey 2012=2013)の実践によって初めてコモنزとして存立する(Miura 2023)。

⁵ 連続立体交差事業に多くの公金が投入されているということが、そうした主張の根拠となっていた。

⁶ 本論の関橋氏の語りは2024年11月2日に行ったインタビューに基づく。

⁷ グリーンライン下北沢以外の運動団体(save the 下北沢、まもれ!シモキタ行政訴訟の会、事業者協議会など)にとっても、世田谷区や小田急電鉄との対話は強く求められていた(三浦 2016)

⁸ 小柴氏は自著で、「住民と自治体職員の顔の見える関係」を重視しているという点、また「街づくりを総合的な視野で捉える街づくり課」が「縦割り組織を横につなぎながら総括して地域についていく上で、重要な役割を担っている」という認識を持っていることを明らかにしている(小柴 2022:194-196)。また、本論の北島氏の語りは2024年11月11日に行ったインタビューに基づく。

⁹ 身近な広場条例(平成7年3月10日条例第19号)は「区民のだれもが日常的に遊び、憩う場を提供するとともに、緑とオープンスペースの確保を図り、もって区民の福祉の増進に寄与する」こと

を目的に、民有地も公園に準じるような広場として扱う条例である。

¹⁰ 世田谷区街づくり課から提供して頂いた資料から抜粋した。

¹¹ 横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院の主催で行われた公開講座「横浜建築都市学」(2024 年度秋学期)の中で、2024 年 11 月 19 日に行われた三島氏の講演「まちの共治を育む庭と園藝」に基づいている。

¹² シモキタ園藝部 facebook より引用した。

¹³ 園藝と絡めたファッションショーの開催、緑で囲まれた屋外映画館の設置など、現時点ではまだ実現はされていないが、自由なアイデアが出されていた(シモキタ園藝部 facebook にその詳細は掲載されている)。

¹⁴ その後、2022 年春頃に斉藤氏は、コンポスの活動の為の小屋(「なや」)を建設するために奔走している。斉藤氏によれば、当初、小田急電鉄からは、契約上、建築物は建てられないので、世田谷区建築審査課に相談したところ「屋根が膜状のものであれば、建築基準法上、建築物に該当しない」という見解があったので、小田急電鉄から小屋の建設の許可を得ている。世田谷区街づくり課の担当職員北島氏も、園藝部のメンバーに対して「顔の見える関係」を前提にしたアドバイスを心がけており、その理由として「園藝部については、今までの経過も、熱い思いも知っているし、自分たちのアイデアで活動しようとするじゃないですか。なので相談も受けやすい」といった点を挙げており、世田谷区とシモキタ園藝部との蓄積されてきた正循環の関係性が、後述する園藝部の様々なアイデアの実現を後押ししている。

¹⁵ また、本論の斉藤氏の語りは 2024 年 11 月 23 日に行ったインタビューに基づく。

¹⁶ このイラスト化はフォルクが業務として担っていた仕事であった。

¹⁷ ちなみに、現在でも、シモキタ園藝部を紹介するフライヤーや HP には、活動初期に提案されたアイデアのイラストが利用されている。

¹⁸ 北沢 PR 戦略会議の緑部会は、メンバーの多くがシモキタ園藝部にも参加しており、シモキタ園藝部に合流するという形になっている。

¹⁹ シモキタ園藝部公式 HP から抜粋した。

²⁰ 集めた古樹は定期的に、マーケットを開催して、「こや」で販売されている。最低金額はあるが、基本的には、買い手の人が決めるという形が採用されている。

²¹ 公開講座は年間で 9 回、受講料は約 4 万円となっている。また、植栽管理の現場では、それぞれの管理エリアのリーダー(講座の修了生)が、草木の特徴や植栽の仕方などについて知識を参加者に共有し、参加者も興味津々に聞いている。また、紹介される草木や咲いている花等に対して参加者のほとんどが「可愛い」という言葉を発しており、自然への愛着が生まれ、共有されていることが分かる(2024/9/14 フィールドノート)。

²² 土は 2 リットルあたり 500 円で販売されている。

²³ 他にも、堆肥の中に電極を挟み、微生物が分解する時のエネルギーを電気として利用する「コンポスト発電」を株式会社ニソールとシモキタ園藝部員の一人が共同開発し、イベント時などに利用している。

²⁴ 共同代表理事の柏氏のインタビュー(2022 年 10 月 31 日)に基づく。また、柏氏によれば、緑部会からの参加者で理事になっているのは 5 名いる。

²⁵ これまでに、セブンイレブン記念財団環境市民活動助成、世田谷区地域連携型ハンズオン事業、ハウジングアンドコミュニティ財団「住まいとコミュニティづくり」活動助成、世田谷まちづくりファンドつながりラボ部門助成、積水ハウスマッチングプログラムなど数々の助成金を受託している。

²⁶ 植栽管理に関しては、コアメンバーはシモキタ園藝学校を卒業し技術や知識を持っている人達で現在は 20 名ほどいる。また、専門的な仕事の報酬は、仕事をする人との相談で決めているが、高額になることはなく、園藝部と当人が続けていける価格になっているという(2024/11/19 三島氏の講演より)。

²⁷ クーポンは他人に渡すことも可能であり、コミュニティ通貨のような機能も持っている。実際、メンバーがクーポンを周囲の人間に渡すことで、多くの人との繋がりが生まれたこともある(2024/11/19 三島氏の講演より)。これは現金では難しいことであり、クーポンというモノが可能にしているつながりとして考えることができる。

²⁸ シモキタ園藝部では、上述した活動において様々な新しい試みが累積していく点に特徴があ

るが、本稿は紙幅の関係上、コンポストチームの活動に焦点を当てる。また、以下の参与観察のデータは筆者が園藝部員となり、2024年9月から12月にかけて、2週間に1回定期的に行われるコンポストの切り返しの作業に参加して得たものである。

²⁹ コンポストチームに明確なメンバーシップがあるわけではないが、主にコンポストの作業に携わるコアメンバーは5人程存在する。周辺地域に住んでいる人もいれば、電車を通ってくる人もいる。また、不定期に活動に参加する人や、一回限りの参加者も一定数存在するが、そうした参加者が問題視されることはなく、受け入れられている。

³⁰ その後、育てた野菜で鍋パーティをする企画は、「園藝部 DAY:切り返し体験&テーブル畑の収穫祭」(2024年10月26日開催)というイベントで実現している。

³¹ ハウジングアンドコミュニティ財団『住まいとコミュニティづくり活動助成報告書』(令和4年度)にその詳細が記載されている。

³² 西尾はインフラストラクチャーを対象とした議論の文脈で「ケア」を「ある対象の状態を健全な状態へと回復させる実践、さらにその実践を可能にする社会関係と認知の能力」(西尾 2024:145)と論じているが、これは自然にも適用可能であると考ええる。

³³ 「なや」自体に脆弱性があるとしても、簡単な作りであるが故に、メンバーが協力してすぐに修理可能であるという意味では、耐久性があるとも言える。

³⁴ 斎藤はアントニオ・ネグリの議論を参照しながら、アントレプレナーシップを「資本主義を超えた新しい社会を作る、マルチチュードの『自治』のための能力」(斎藤 2023:268-269)として定義している。

【文献リスト】

Evers, A. and Laville, J.L.ed, 2004, *The Third Sector in Europe* (2007、内山哲郎・石塚秀雄・柳沢敏勝訳、『欧州サードセクター——歴史・理論・政策』、日本経済評論社)

Harvey, D, 2012, *Rebel cities: from the right to the city to the urban revolution*(=2013、森田成也・大屋定晴・中村好孝・新井大輔訳、『反乱する都市——資本のアーバナイゼーションと都市の再創造』、作品社)

橋本崇・向井隆昭、2022、『コミュニティシップ——下北線路街プロジェクト』、学芸出版社

Hughes, D. J., A. Lee, A. W. Tian, A. Newman, and A. Legood. 2018. “Leadership, Creativity, and Innovation: A Critical Review and Practical Recommendations.” *The Leadership Quarterly* 29(5): 549–569.

伊藤嘉高、2024、『移動する地域社会学: 自治・共生・アクターネットワーク理論』、知泉書簡

及川敬貴、2023、『人新世のエコロジー——自然らしさを手なづける』、日本評論社

鬼頭秀一、2024、「人と深い関わりがある自然の保全の理念はどうあるべきか」、太田和彦・吉永明弘編『都市の緑は誰のものか』、ヘウレーカ

近藤ヒデノリ・Tokyo Urban Farming、2023、『Urban Farming Life』、トゥーヴァージンズ

小柴直樹、2022、『人をつなぐ街を創る——東京・世田谷の街づくり報告』、共栄書房

三島由樹、2022、「ネイバー・エコロジカル・コモンズ : シモキタ園藝部がはぐくむ近隣生態系の総有的共治」、都市計画 71(5)、pp72-75.

三浦倫平、2016、『「共生」の都市社会学——下北沢再開発問題の中で考える』、新曜社

三浦倫平・武岡暢編、2020、『変容する都市のゆくえ』文遊社

Miura, Rinpei, 2023, “Impact of the COVID-19 pandemic on public space in Tokyo”, in *How Pandemics*

-
- Shape the Metropolitan Space. Impact of COVID-19 on Urban Development in Vienna and Tokyo, Barbara Rief Vernay, Iris Mach (Eds.), LIT verlag, pp91-112.
- Muraca, B. (2011). The map of moral significance: A new axiological matrix for environmental ethics. *Environmental Values*, 20 (3), 375 — 396.
- 西尾善太、2024、「不可能性に抗して<観る>ために——ジープニーをケアするインフラ労働」、古川不可知『モビリティと物質性の人類学』、春風社、pp137-160.
- 阪口毅、2022、『流れゆく者たちのコミュニティ—新宿・大久保と「集合的な出来事」の都市モノグラフ』、ナカニシヤ出版
- 斎藤幸平＋松本卓也編、2023、『コモンの「自治」論』、集英社
- 市民セクター政策機構、2021、『季刊社会運動 No. 443 ワーカーズ・コレクティブ』、ほんの木
- 新保奈穂美、2022、『まちを変える都市型農園』、学芸出版社
- 高橋ユリカ・小林正美、2015、『シモキタらしさのDNA』、エクスナレッジ
- 谷本寛治・大室悦賀・大平修司・土肥将敦・古村公久、2013、『ソーシャル・イノベーションの創出と普及』、NTT 出版
- 谷本寛治編、2015、『ソーシャル・ビジネス・ケース——少子高齢化時代のソーシャル・イノベーション』、中央経済社